

氏 名 池 田 菜採子
学位の種類 博士（文学）
学位記番号 甲 第 6 4 号
学位授与の日付 2017 年 3 月 18 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項 該当
学位論文題目 **Bernard Bloch の日本語教育への貢献**

学位審査委員 主査 教授 山 上 義 実
副査 教授 藤 森 清
副査 教授 高 野 祐 二
副査 南山大学教授 坂 本 正

論文内容の要旨

言語学者 Bernard Bloch は、太平洋戦争中のアメリカで、日系人のインフォーマントを相手に日本語研究を行い、数々の優れた日本語論及び *Spoken Japanese*（以下 SJ と略す）という日本語教科書を発表した。そうした諸論文の一部が、後の言語学である生成文法の中で、また国語学の立場からは活用論という観点で取り上げられることはあった。しかし、日本語教育という観点からは、彼の日本語研究が見直されることはこれまで一度もなかった。したがって、日本語教育に従事する者の中で、太平洋戦争後の日本語教育に Bloch の日本語研究が多大な影響を与えていることは、ほとんど知られていない。彼の日本語教育への功績は、評価されることがなく今日に至っているのである。

本論文は 8 章から成る。各章において、それぞれ次のような観点からの考察を行い、その過程で、Bloch の日本語教育への貢献を浮き彫りにしていきたい。

まず、第 2 章から第 4 章は、日本語教科書 SJ を考察する。

第 2 章では、Bloch が作成した SJ が、どのような経緯で作られたか詳しく見ていく。SJ は、実は単独に企画された教科書ではない。戦時中、アメリカは軍人教育の一環として、*Education Manual* という膨大な教材を作成した。この教材は、文学や数学など幅広い分野を網羅するものであった。このうち、語学教材は言語学者 Leonard Bloomfield を中心とするアメリカの構造主義言語学者集団によって作られた。SJ はその中の一つである。

第 3 章では、SJ に収録された練習問題を考察する。SJ は、軍人が話し言葉を習得することを目的とし、また独学でも学べるように工夫された教科書であったため、練習問題が多く収録された。現在でこそ日本語授業の中で話す練習をさせることはごく普通のことである。しかし、SJ 以前の日本語教科書には話すための練習問題は、ほとんど見当たらない。その意味で SJ は画期的な教科書であった。Bloch が作った練習問題にはどのようなもので

あったのか見ていきたい。

第4章では、SJ 付属のレコードについて考察する。SJ には、もともと付属レコードがついていたのだが、これは2016年10月現在、国内でその所在を確認することはできない。1972年に出版されたSJの復刻版には付属カセットテープがついていた。このカセットテープが全巻揃っているのは、CiNii 及びNDLサーチで調べた限り、国内では国際日本文化研究センター（京都市）だけである。このカセットテープをもとに、レコードにはどのような音声収録されているのか、なぜSJのレコードは作られたのかを検討する。

続いて、第5章から第7章は、Blochの日本語論を取り上げる。

第5章では、Bloch(1950)をもとに、母音の無声化と脱落に関する研究を行う。Bloch(1950)は、「進む」を[sUsumu]、「捨てる」を[s' teru]と表記し、前者の「す」は母音が無声化したもの、後者の「す」は母音が脱落したものとして書き分けている。Blochにはなぜどのように聞こえるのか、そこには何か規則性があるのかを探っていきたい。第4章でもレコードに収録された音声を考察したが、日本語の全ての音素と異音を書き出したBlochの業績は、ただその一点のみをもってしても十分に高く評価されるべきである。

第6章では、動詞の活用論を考察する。Bloch(1946a)が記述した動詞の活用論は、動詞を母音動詞と子音動詞に分けた点において斬新なものだった。彼の活用論は、その後の日本語教育の基盤となったと言っても過言ではない。第6章では、戦時下のアメリカで出版された日本語研究を検証し、当時のアメリカでの日本語教育についてその一端を明らかにする。

第7章では、繫辞（コピュラ）の「だ」を考察する。現在の日本語教育では、日本語の述語は動詞、形容詞、「名詞+だ」の3本立てであると教えるのが一般的である。しかし、はじめから3本立てであったわけではない。動詞、形容詞が、以前から述語として安定的地位を保っていたことに比べると、「名詞+だ」はなかなか述語としての地位を確立することができなかった。3本立てになったのは、Bloch以降である。第7章では「だ」の解釈の変遷を、文法諸家の見解をもとに考察する。

以上の観点から考察を行うことで、Blochが現代の日本語教育にどのような貢献をしたかを明らかにすることに、本論文の意義は認められるのである。

審査結果の要旨

本論は、太平洋戦争中のアメリカで日系人のインフォーマントを相手に日本語研究を行い、数々の優れた日本語論を発表し、日本語教育の面においても **Spoken Japanese** (以下 **SJ** と略す) という教科書を作製して多大の貢献をしたにもかかわらず、その業績が正しく評価されずほとんど埋もれている言語学者 **Bernard Bloch** の特に日本語教育の面における功績を掘り起こそうとしたものである。400字詰原稿用紙にして大体700枚を超える長大な本論文は、内容上二分することができる。前半はブロックの作成した **SJ** という日本語教育用教科書に関する詳細な調査・考察であり、後半はブロックの日本語学上の三つの業績を取り上げ、その意義と日本語教育上における功績について論じている。

本論第2章から第4章は、**SJ** というテキストの調査・分析であり、第2章でまず本テキストの概要を説明し、次いで成立の経緯と背景を考察する。太平洋戦争中アメリカでは、軍人教育のために **Education Manual** という文学、歴史、数学、経済学、農学など幅広い分野を網羅する膨大な教材を作成した。外国語教育もその一環であり、言語学者 **Leonard Bloomfield** を中心にアメリカの構造主義言語学者集団によって数多くの語学教材が作られた。それまでの外国語教育は読解中心の文学や文化を学ぶものであったが、軍人教育には戦争遂行のための実際的な会話能力の育成が必要とされた。その目的に応じて新しい教授法が研究され、現実的な日常会話能力の養成に徹した各種の語学教材が作成され、**SJ** はその1冊であるという。次いで第3章では、**SJ** 所収の練習問題に注目し、その内容を精査し、同シリーズの **Bloomfield** が作成したドイツ語の教材や同時代に日本人の手によって作られた日本語教育の教材などと比較し、ブロックの教材がいかに優れたものであるかを論じる。第4章は、**SJ** に付属するレコードに関する調査、考察である。**SJ** は、最初1945年に軍人教育用に米国戦争省から出版され、同じ年に **Holt** 社から一般人向けに出版され、その後1972年に復刻版が出版されているという。前二つにはレコード盤が、復刻版にはカセットテープが付属していたが、2016年10月現在国内ではレコード盤の存在は確認できず、カセットテープも全巻揃っているのは国際日本文化研究センターのみであるという。そのテープを精査し、テープの概要を説明した上で、日本語吹込者の音声的特徴を分析し、インフォーマントについて考察し、その中の一人「羽根幹三」について追跡調査する。さらに、戦前・戦中の語学教育の音声教材の状況を調査し、ブロックのテープがいかに先駆的な存在であったかを論じる。「**Bloch** の日本語教育上の業績の一つに **SJ** があることは、日本語教育関係者にほとんど知られることなく今日に至っている。まして付属のレコードは、これまで全く日の目を見ることがなかった。そのレコードの存在を明らかにしたこと、またその過程で羽根幹三という日系人を掘り起こすことができたということが、第4章での研究の大きな意義である。」と筆者は記す。

ここまでの本論の高く評価できる点は、主張する内容はもとより、何よりも時間と能力

を惜しまない丹念で誠実な調査の姿勢である。SJ というテキストの調査をするに当たり、SJ のみでなく入手可能な Spoken Language Series のテキストを求めて他大学の図書館まで搜索し、入手可能な 17 言語のテキスト全てに目を通している。所属レコードの調査にしても、国内で唯一所蔵している国際日本文化研究センター（京都市）の特別共同利用研究員としての資格を取得して同研究所に出入りし、240 分に渡るテープを隅々まで注意して聴取し、検討している。日文研所蔵のカセットテープ（1972 年の復刻版に付属していたもの）が、1945 年に出版された初版のテキストに付属していたレコードと同一音声であり、1972 年時点で改めて別人が吹き込み直したものでないことの傍証として挙げる、「カセットテープでは、例えば Record 2A から Record 2B に移る場面でガチャと切れる音が入っており、これらの切れ目は全てレコードの切れ目と一致している。」といった指摘などは、筆者の注意深い聞き取りと鋭い洞察力を窺わせるものとして頗る興味深い。その他必要に応じて幅広く様々なテキストに目を通し、第 2 章から第 4 章の主張は全て、そうした精緻で丹念な調査に基づくもの、というよりもきめ細かく注意深い調査であるからこそ気付くことのできたものであるといえよう。

論文の後半は、ブロックの日本語論を巡っての考察である。第 5 章は、母音の脱落と無声化を問題とし、ブロックの記述した 458 個の音声表記をもとにブロックのような英語話者にとってどのような場合に母音が無声化したり脱落したりするように聞こえるかを考察し、その結論の日本語教育上における意義について論じる。第 6 章では動詞の活用論を問題とし、ブロックの活用論の特徴は動詞を母音動詞と子音動詞とに分ける点にあるとして、その学説が生まれてきた背景を探るべくそれ以前及び周辺の研究者の動詞の活用に関する研究内容を詳細に検討し、そうした研究史上におけるブロック学説の意義を論じる。第 7 章は「妖怪「だ」の研究：何もないのか、ゼロがあるのか」と題し、多くの研究者を悩まし様々な学説が錯綜する「名詞+だ」の「だ」を妖怪「だ」と名付け、「だ」の語性に関する文法諸家の学説を探り、その変遷を整理し、ブロック説の意義を論じる。

本論後半の特長は、前半の研究姿勢にも共通するものであるが、労を厭わず必要と思われる文献を探索し、読みこなし、良く整理しているということである。ブロックの動詞活用論を論じるに当たり、ブロックの学説のみでなく馬場辰猪、山田孝雄、Chamberlain、Yamagiwa、Suski、Henderson 等といった研究者の説をも広く学び、そうした広い領域の中でブロックの学説を評価しようとする。「だ」の研究においても、山田孝雄、松下大三郎はじめ 8 名の研究者の学説が紹介されている。複雑で微妙な語性を持つ「だ」に関する学説一つを理解するだけでも決して容易でない所を、8 名の学説を消化し、整理し、その違いを一覧表（162 頁表 7-1）にまとめている点などは高く評価できる。背後に膨大な作業量のあったことが推測される。第 6 章に論じられるブロックの日本語の動詞は最後が母音で終るか子音で終るかで二分されるという説は、ほとんど世に知られていない Suski への批判として Suski の作成した言語資料をもとに考えだされたものであろうという新知見は、広い視野に立って時間と労を惜しまず一つ一つ諸家の学説を検討していった所から生まれ

てきたものであるといえる。また、第7章の「アノ人ハ病気サ」の「病気」と「サ」の間には何もないのではない、ゼロがあるのだというブロックの学説が「名詞+だ」が述語として認められる上に大きな役割を果たし、その意味で日本語の述語は動詞、形容詞、「名詞+だ」の3本立てであると教えるのが一般的になっている現在の日本語教育の世界に果たしたブロックの貢献を見忘れてはいけないという筆者の主張も、多くの学説の紹介とその変遷の整理があることによって頗る説得的であるといえる。

数々の新知見に富む本論文は、以後の **Bernard Bloch** 研究においては避けて通ることのできない必読の研究書であると思量し、高く評価するものである。